

13-3 血漿交換療法が奏功した骨髓異形成症候群に合併した難治性血球貪食症候群の1例

昭和大学藤が丘病院内科 湘南クリニック*

○里見明代、横田直子、田山宏典、渡辺 励、佐藤良和、緒方浩顕、衣笠えり子、秋澤忠男、出浦照國、平良隆保*

症例は56才、女性。慢性糸球体腎炎を原疾患とする慢性腎不全のため、1988年10月より血液透析に導入され、以後週3回の維持透析中であった。1996年10月頃より、原因不明のエリスロポエチン(EPO)抵抗性貧血が認められ、適宜輸血が行われていた。1998年4月より発熱、咳嗽が出現、徐々に汎血球減少症が進行したため、同年5月当院に入院となった。入院時、末梢血液では著明な汎血球減少(WBC 1700/ μ l, Hb 5.4g/dl, Plt 4500/ μ l)と骨髓芽球が認められた。骨髓穿刺では、骨髓低形成および血球貪食像がみられ、染色体解析では8 trisomyを示した。以上より骨髓異形成症候群(MDS; refractory anemia with excess of blasts)に併発した血球貪食症候群(HSP)と診断した。パルス療法を含むステロイド及びG-CSF, EPO投与を行ったが、効果がみられないため、血漿交換療法(PP)を施行したところ、汎血球減少は徐々に改善した。

MDSを基礎疾患として、感染症等が契機となりHPSを発症したと考えられる症例であるが、PPによる高サイトカイン血症の是正により、その病態が改善したと推測された。

14-1 リクセルビーズの微生物菌体成分の吸着能について

大阪市立大学医学部附属病院人工腎部

○土田健司、武本佳昭、垣谷裕子、岸本武利

目的： β 2マイクログロブリン(BMG)吸着カラムのリクセルはBMGだけでなく、炎症性サイトカイン吸着することを報告した。今回、全身性炎症反応症候群(SIRS)患者への応用を考慮し、微生物菌体成分の吸着能について明らかにすることを目的とした。

方法：リポポリサッカライド(LPS)(E. coli : B8)、エンドトキシン(ET)含有汚染水、ミクロコッカスルテウスのペプチドグリカン(PG)を使用し、各溶液の初期濃度はLPS (ET:29,135 $\pm$ 4,416EU/L)、汚染水(ET:817.5 $\pm$ 351.8EU/L)、PG(26.4 $\pm$ 11.8ng/ml)であった。原液および10、100、1000倍希釈した各溶液2.5mlにリクセルビーズを体積量で0.5ml混入した。37℃で2時間振盪させた後、各溶液中のETをLAL-ES法で、また、PGはSLP法を用いて測定した。結果：LPSおよび汚染水のETはいずれの濃度であってもリクセルビーズ混入群で有意に低値であった。またPGに関しては有意差はなかったが吸着される傾向であった。考察：リクセルビーズはBMGだけではなく、ET中心とした微生物菌体成分も吸着する。したがって、炎症性サイトカインの吸着も併せて考えると、リクセルは感染性SIRSに十分応用できる吸着カラムであると考えられる。